

岩木健診 機器開発に寄与

弘前大学が弘前市岩木地区で実施している「岩木健康増進プロジェクト健診(岩木健診)」で蓄積された健康ビッグデータを活用し、国内大手企業が最新の健康デバイスを開発する動きが広がっている。スマートフォンで人を撮影するだけで内臓脂肪を測定できるアプリを開発している花王は、精度向上に岩木健診のデータを活用。NECは顔から得られる情報を基に、動脈硬化や浮腫(むくみ)を推定するアプリの研究を進めている。企業側は「健康づくりの機運を一層高めたい」と話し、弘大関係者も「社会に還元できるよう、今後も連携を深めたい」と意欲を示す。

(菊谷賢)



「ナイボ・アイ」で内臓脂肪の量を推定している様子。開発した花王の担当者は「岩木健診のデータから、メタボ発症のリスクも予想できるようにしたい」としている

内臓脂肪、動脈硬化測定… 国内大手 データ活用



約3千項目の健診データを集める岩木健診の会場。2025年5月31日

Q 岩木健康増進プロジェクト健診 弘前大学が弘前市岩木地区で2005年から継続して実施している住民参加型の健康調査。病予防や健康寿命延伸につながる健康施策の実現などを目的としている。検査項目は身長・体重、血液、野菜摂取量、運動機能、認知機能、生活習慣など約3千に及ぶ。25年は、岩木地区以外に市民を含め約1300人が参加。岩木健診のビッグデータを基に、弘大は啓発型健診「QOL健診」を開発している。

花王が2024年に開発した非接触型内臓脂肪測定器「NAI(No eye)」「NAI(No eye)」は、スマートフォンで対象者の全身を正面と側面から撮影すると、内臓脂肪量の指標が画面に表示される。従来の接触型測定器とほぼ同等の精度を実現しており、その背景には、岩木健診のデータを解析し、検証した成果があるという。内臓脂肪は血圧や血中脂質、血糖値の異常を招き、動脈硬化のリスクを高める要因とされる。脳卒中や心疾患、糖尿病合併症の発症にもつながりやすく、県民「血流など6項目を推定でき

平均寿命延伸を図る上で、対策は重要な課題となっている。花王研究開発部門特命エグゼクティブ、弘大招聘教授の桂本龍久さんは「弘大が開発したQOL健診などでナイボ・アイを活用し、健康づくりへの関心をさらに高めたい」と話す。同社は今後、岩木健診データの分析をさらに進め、メタボリック症候群の発症を予測するアプリを開発する計画だ。

世界トップクラスの顔認識技術を持つNECは、顔の動画撮影によって脈拍や疾患、糖尿病合併症の発症にもつながりやすく、県民「血流など6項目を推定でき

独自の「バイタル推定技術」を24年に開発。同年から岩木健診に参加し、改良型装置の研究に取り組んでいる。岩木健診では、カメラで受診者の顔を撮影し、表情と健康状態の関連を調査。将来的には、動脈硬化や浮腫の推定を可能にしたい考えだ。

同社バイオフィクス研究所の中原謙太郎さんは「岩木健診で得たデータを、最大限生かし、次の可能性を探りたい」と述べた。カゴメは15年から岩木健診に参加し、血液の中のビタミンや抗酸化物質を測定。野菜摂取量を推定する機器「ベジチェック」を開発後、18年から岩木で機器の有効性を検証してきた。認知度は全国的に高まり、明治安田生命が全国展開するQOL健診などにも導入。25年6月時点で、延べ1700万回以上測定されている。

カゴメ食健康研究所シニアスパンヤリストの菅沼大行さんは「岩木で有効性を確認できたからこそ、全国展開につながった。ベジチェックは弘前で育ててもらったと考えていると語った。岩木健診の立ち上げ当初から運営に携わる中、路量之・弘大特別顧問は「世界的にも例を見ない、全身データが集積された岩木健診のデータが、多様な健康デバイス開発を可能にしている」と強調。「QOL健診などで機器を活用し、より健康意識が高まり、人と人との交流も生まれる。地域経済の活性化にもつながり、結果として社会全体のウェルビーイング(心身の健康と幸福の実現)に寄与していく」と述べた。